

幼稚園教育要領「人間関係」「言葉」の尺度化の試み

— 保護者による回答の分析 —

中山 満子（奈良女子大学文学部）

1. はじめに

新幼稚園教育要領¹⁾においては、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明確化された。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮すべきものとされている。

本論では、教育要領に示された“ねらい”及び“内容”の5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）の中から、人との関わりに関する領域「人間関係」と言葉の獲得に関する領域「言葉」を取り上げる。5つの領域はもちろんそれぞれ関連しているが、とりわけ、身近な大人や友達などとの人間関係の形成と言葉の獲得は関連が深いと考えられるからである。

教育要領におけるねらいは、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児が生活する姿からとらえたもの、内容はねらいを達成するために指導する事項とされており、実際にねらいが達成できているかどうかは、内容の事項が出来ているかどうかで判断することとなる。ここではすべてでは記載しないが、領域「人間関係」は、他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養うことを目的として、3つのねらいと13の内容から成る。また領域「言葉」は、経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養うことを目的とし、3つのねらいと10の項目から成る。

本論では、保護者や教師からみた幼児の姿をとらえるために、これらの内容項目を尺度化することを試みる。内容の事項は一見、多岐にわたっているが、その背後にはいくつかの因子が想定される。この因子を抽出し得点化することで、内容を縮約して示すことができると思われる。もちろん、園児の姿を個別詳細にみることは重要であるが、共通の観点からおおまかに発達の傾向を記述したり、必要に応じてクラスや園などのまとまりごとの傾向や経年変化を見るときには、縮約した得点が簡便な指標となりうると考える。

そこで、本研究では、「人間関係」と「言葉」の内容を尺度化し、実際に園児の保護者からの回答によって、園児の発達の様相を記述することを試みる。

2. 方法

2-1. 調査対象者と実施手続き

平成29年11月下旬に関西圏の中核都市にあるA幼稚園の保護者を対象に質問紙調査を実施した。調査用紙は、園児の保護者に幼稚園から配布し、後日、無記名で園に提出された。回答は任意であること、回答の有無や内容によって園児の生活や教育に影響がないことを明記した。

調査の結果、122名の保護者から回答を得た。そのうち尺度項目に欠損値のあるものを除き、107名を分析対象とした。デモグラフィック変数にのみ欠損値があるものは分析に加えた。107名のプロフィールは以下のとおりである。平均年齢は38.4歳（SD=4.4）、男女の内訳は、男性

2名、女性103名、不明2名であった。就労状況は、フルタイム就労者4名、パート・アルバイト9名、専業主婦（夫）・無職94名であった。また当該幼稚園に通っている子ども（複数いる場合には年長児）は、3歳8名（7.5%）、4歳35名（32.7%）、5歳40名（37.4%）、6歳23名（21.5%）、不明1名で、男女の内訳は男児47名、女児59名、不明1名であった。

2-2. 質問項目

教育要領の「人間関係」「言葉」の内容に基づいて、質問項目を作成した。その際、内容の各項目には複数の内容が含まれている場合が多いことから、そのまま用いるのではなく、質問文を作成し直した。例えば、「友だちと積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う」という項目には、「積極的に関わる」という内容と「共感し合う」という内容が含まれている。この字句通りに幼児の姿をとらえようとすると、場合によっては矛盾や困難を引き起こすことにあるだろう。なぜなら積極的に関わっても共感できないということはあるし、共感する前提として必ずしも積極的に関わらなければならないということもないと思われるからである。教育要領としては、あまり多くの内容を羅列することを避けるために、「人間関係」では13の、「言葉」では10の項目にまとめられているのではないかと考えられる。そこで今回は、これら複数の内容が含まれている場合には、それらを分けて質問項目を作成した。例えば、前述の「友だちと積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う」の場合には、「友だちと積極的に関わる」「友だちの気持ちに共感する」の2項目に分割した。このようにして、「人間関係」は17項目²⁾、「言葉」は16項目の質問文を作成し、保護者から見て自分の子ども（園児）が、それらの事項をどれくらいできているか、4段階で評定することを求めた（質問項目は、結果を参照）。

その他、回答者と回答者の子どものデモグラフィック変数、子どもの習い事について質問した。

3. 結果

3-1. 尺度構成

人間関係 16項目について、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、固有値1以上の基準で4因子が抽出されたが、第4因子は解釈が難しく α 係数も低かったため、これ以降の分析からは除外する。表1に第3因子までの結果を示す。

表1 「人間関係」についての因子分析結果

	因子			
	1	2	3	4
積極的関わり ($\alpha=.814$)				
友だちとの関わりを深める	.886	-.046	.118	-.101
友だちと一緒に活動する楽しさを味わう	.703	.080	-.024	-.036
友だちと積極的に関わる	.606	-.113	-.034	.235
先生や友達とともに過ごすことに喜びを感じる	.578	.135	-.110	.214
理解・共感 ($\alpha=.808$)				
相手の思っていることに気づく	-.051	.793	-.099	.066
友だち良いところに気づく	-.102	.715	.097	-.024
友だちの気持ちに共感する	.378	.598	-.028	-.218
友だちとの活動で、工夫したり協力しあう	.088	.503	.020	.083
友だちに対して、思いやりを持つ	.090	.498	.154	.068
自立 ($\alpha=.715$)				
共同の遊具や用具を大切に、皆で使う	-.153	.061	.814	-.044
友だちとの生活の中でのきまりの大切さに気づき、守ろうとする	.142	-.005	.621	-.024
自分でできることは自分でする	.074	-.028	.551	.167

第1因子は、「友だちとの積極的に関わりを深める」「友だちと一緒に活動する楽しさを味わう」などの項目に負荷が高く、「積極的関わり」と命名する。第2因子は、「相手の思っていることに気づく」「友だち良いところに気づく」などに負荷が高く、「理解・共感」と命名した。第3因子は、「共同の遊具や用具を大切に、皆で使う」「友だちとの生活の中でのきまりの大切さに気づき、守ろうとする」などに負荷が高く、「自立」と命名した³⁾。ほぼ単純構造であり、内的整合性も十分であるので、因子に負荷の高い項目の素点を単純加算し項目数で除したものを、それぞれの得点とした。

言葉 同様の手順で16項目に探索的因子分析を行った。その結果、表2に示すように4因子が得られた。第1因子は「したいこと、してほしいことを言葉で表現する」「見聞きしたことや、自分のしたことを、自分の言葉で表現する」などの項目に負荷が高く、「発話・表現」と命名した。第2因子は、「生活の中で言葉の楽しさや美しさに気づく」「生活の中で必要な言葉がわかる」などの項目に負荷が高く、「豊かさ・運用」と命名した。第3因子は、「絵本や物語などに親しみ、想像する豊かさを味わう」「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞く」などの項目に負荷が高く、「絵本・物語への親しみ」と命名した。第4因子は、「先生や友達の言葉や話に興味、関心を持つ」「先生や友達の言葉や話を親しみをもって聞く」などの項目に負荷が高く、「聞くこと」と命名した。各因子に負荷の高い項目の素点を単純加算し項目数で除したものを、それぞれの得点とした。

表2 「言葉」についての因子分析結果

	因子			
	1	2	3	4
発話・表現 ($\alpha=.826$)				
したいこと、してほしいことを言葉で表現する	.854	-.104	-.095	.042
見聞きしたことや、自分のしたことを、自分の言葉で表現する	.680	-.035	.229	-.058
考えたこと、感じたことを、自分の言葉で表現する	.643	.032	.107	.039
わからないことは尋ねる	.496	.180	-.094	.036
相手にわかるように話す	.390	.274	.099	.057
豊かさ・運用 ($\alpha=.790$)				
生活の中で言葉の楽しさや美しさに気づく	-.133	.905	-.052	-.002
生活の中で必要な言葉がわかる	.002	.674	.042	.185
日常生活の中で文字で伝える楽しさを味わう	.102	.569	.047	-.271
いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする	.089	.443	.212	.089
生活の中で必要な言葉を使う	.174	.355	.065	.237
絵本・物語への親しみ ($\alpha=.757$)				
絵本や物語などに親しみ、想像する豊かさを味わう	-.057	.178	.922	-.147
絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞く	.011	.080	.642	.049
親しみをもって日常の挨拶をする	.186	-.205	.497	.176
聞くこと ($\alpha=.762$)				
先生や友達の言葉や話に興味、関心を持つ	.133	.105	-.231	.843
先生や友達の言葉や話を親しみをもって聞く	-.187	-.119	.438	.706
人の話を注意して聞く	.071	-.165	.068	.624

3-2. 年齢による比較

次に、園児の年齢ごとに平均値を算出した。年齢不明の一名を除き、106名を対象とした。「人間関係」の結果を図1に、「言葉」の結果を図2に示す。各年齢の人数にはばらつきがあり、調査時点で3歳である子どもは8名と非常に少数であるが、本論では、実年齢ごとに平均値を求めて傾向をみることにした。

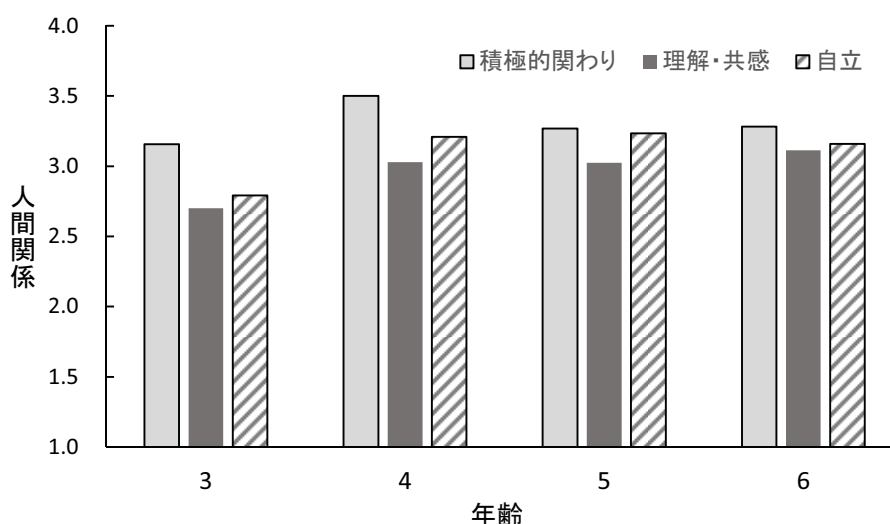


図1 「人間関係」の各因子得点の年齢別平均値

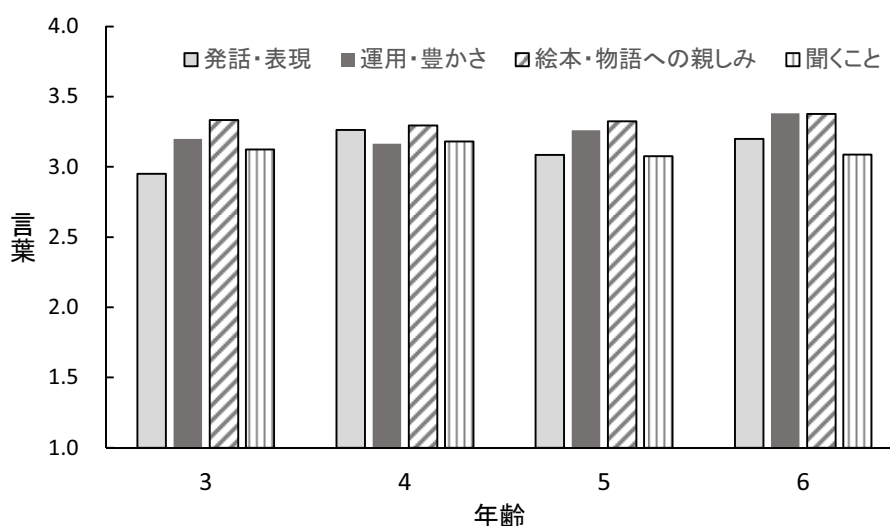


図2 「言葉」の各因子得点の年齢別平均値

まず、「人間関係」について、年齢×得点の混合2要因分散分析を行った。Mauchlyの球面性検定が棄却されたので、Greenhouse-Geisserのイプシロンで補正した数値を参照したが、F値は変わらないため、ここでは通常の分析結果を記述する。分散分析の結果、年齢×得点の交互作用はみられず、得点の主効果のみ有意であり [$F(2,204)=14.71, p<.01$]、Bonferroniの多重比較の結果、積極的関わりの得点が他に比べて高いことが示された。統計的に有意ではないが、図1をみると、3歳、4歳においては特にその傾向が顕著であることが読み取れる。友だちとの交流を楽しむ中で関わりを深めていくことが、相手の気持ちを理解したり共感することや、集団生活の中で自立することよりも、早くに獲得されることが示されている。

同様に「言葉」についても年齢×得点の混合2要因分散分析を行った。ここでも得点の主効果のみ有意であった [$F(3,306)=6.19, p<.01$]。Bonferroniの多重比較の結果、絵本・物語への親しみが、発話・表現および聞くことに比べて高いことが示された。図2をみても、3歳から絵本・物語への親しみ得点は高くなっている。これに対して、「聞くこと」についてはやや得点が低い、これは「人の話を注意して聞く」に対して、「あまりできない」「できない」との回答が25%程度に上っていることに起因していると考えられる。

3-3. 変数間の関連

「人間関係」の3因子と「言葉」の4因子については、いずれも正の相関がみられた(表3)。きょうだいの有無、習い事をしているかどうかなど、いくつかの変数によって得点に差があるかどうかを検討したが、いずれも差は見られなかった。

表3 尺度得点間の相関係数

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
(1) 積極的関わり	-	.530**	.260**	.448**	.315**	.365**	.422**
(2) 理解・共感		-	.473**	.589**	.564**	.516**	.630**
(3) 自立			-	.320**	.226*	.233*	.472**
(4) 発話・表現				-	.646**	.559**	.578**
(5) 豊かさ・運用					-	.594**	.522**
(6) 絵本・物語への親しみ						-	.513**
(7) 聞くこと							-

* $p < .05$, ** $p < .01$

(1)～(3)は人間関係、(4)～(7)は言葉

4. 考察

幼稚園教育要領の領域「人間関係」と領域「言葉」について、ねらいを達成するために指導する事項としてあげられている内容に基づき、これを尺度化し、縮約して得点化することを試みた。園児の保護者に対して、園児がどれくらいその事項を出来ているかについて回答を求めて分析を行ったところ、「人間関係」は、積極的関わり、理解・共感、自立の3因子が、「言葉」では発話・表現、豊かさ・運用、絵本・物語への親しみ、聞くことの4因子が得られた。それぞれ得点化し、さらに年齢別に比較した。

まず「人間関係」についてみていく。本尺度における積極的関わりは、友だちや先生と関わりながら活動できるかどうかを測定しており、日常生活や遊びにおける行動レベルの指標といえる。3歳児においても他の得点に比べて高く、早期に達成できる課題であることがわかる。これに比べると、理解・共感、相手の内面を推測し、理解できるかどうかを測っており、行動レベルというよりは、認知レベルの指標と言える。理解・共感、積極的関わりに比べると全体に得点が低く、特に3歳児において低い。このことは、いわゆる「心の理論」についての多くの知見と一致する。「心の理論」とは、自己や他者の行動を予測したり説明したりするための様々な心的状態の推論を含む心の働きについての知識や原理のことである。「心の理論」研究で用いられる誤信念課題は一般に3歳での通過が50%程度であり、3歳児にとっては難しいことが示されている⁴⁾。本尺度の理解・共感、この「心の理論」の発達と関連していると考えられる。

自立についても、3歳児で低い傾向が読み取れる。また相関分析から、積極的関わりとの相関は有意ではあるが $r=0.26$ と他に比べて低くなっている⁵⁾。つまり、積極的関わりはできても自立はできていないという段階があることが示されている。さらに詳細に検討するために、年齢別に相関を求めたところ、どの年齢でも積極的関わりと自立の相関係数は0.26程度あるいはそれ以下であり、5歳、6歳になっても、どちらか一方が高く、片方は低い園児が一定程度いることが示されている。同様の相関分析を積極的関わりと理解・共感についても行ったところ、全体での相関係数は $r=0.53$ と中程度であるが、年齢別にみると、3歳児では $r=0.26$ 、4歳児で $r=0.47$ 、5歳児で $r=0.51$ 、6歳児では $r=0.75$ と、年齢が上がるにつれて関連が強くなることが

明らかになった。つまり、内容の「友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感しあう」「友達との関りを深め、思いやりを持つ」などの“内容”の項目が、まさに幼児期の終わりの時期に達成できる目標であることと合致していることを示している。

次に「言葉」では、いずれの年齢でも、絵本・物語への親しみが、他に比べて高いことが示された。調査を行った幼稚園の特徴と言えるかもしれないが、3歳の時点から日常的に園児たちが絵本や物語に接する言語活動を行っていることが示されている。

相関分析の結果、「言葉」の4因子の間には全体としていずれも中程度の相関がみられている。年齢別にみると、豊かさ・運用と聞くこと、および絵本・物語への親しμιと聞くことの間で、4歳児・5歳児においては中程度以上の相関を示しているのに対して、6歳児においてむしろ相関が低いという結果が得られた（順に $r=0.30$, $r=0.11$ ）。散布図で確認すると、6歳児において、聞くことの得点が低い数名の園児の存在が相関係数を下げているようである。これは、サンプル数の少なさ、特定の幼稚園のデータであることから、このサンプルに特有の個人差を反映したものと考えられ、一般化することはできない。逆に言うと、本研究のように得点化して数量的に傾向をみようとするときには、あくまでそのサンプルのおおまかな傾向を示す数値に過ぎないことに留意しなければならないことを示しているとも言える。一方で、言葉に関して、表現や運用面では順調に発達しているが、人の話に注意を向けて、興味関心を持って聞くことということについては、やや苦手としている幼児がいることも事実であり、これを簡便にスクリーニングするなど、利用のしかたによっては有用なツールとなりうることを示唆しているとも言えよう。

最後に「人間関係」と「言葉」の各得点間の相関分析結果についてみる。すべての項目に正の相関がみられ、両者の関連が強いことを示している。特に「言語」の4因子と「人間関係」の理解・共感との関連が強いことが特徴的に見て取れる。他者とコミュニケーションをとる能力の発達と、他者の内面を推測し共感する能力（すなわち「心の理論」）の発達が関連しているという多くの知見と一致した結果と言えよう。

最後にまとめと今後の展望を述べる。本研究では、幼稚園教育要領の領域の中から「人間関係」と「言葉」を取り上げ、内容を尺度化し、幼稚園児の保護者の回答を分析した。尺度構成については、探索的ではあるが、ある程度妥当で解釈可能な得点化ができたと思われる。ただ、限られた一時点のサンプルでの分析であり、十分に発達の程度を測れるかどうかについては、サンプルを増やして、また継時的にデータを取得して検証する必要がある。前述したように、年齢やクラスでの平均点のみ、あるいは相関係数のみで判断することは、個々の幼児の姿を正しく捉えられないという危険をはらんでいる。一方で、数値の意味と限界を了解したうえで用いれば、おおまかにある集団における発達の傾向をとらえるのに有用であるし、簡便なスクリーニングのツールとして利用することも可能ではないかと考えられる。今回は、「人間関係」と「言葉」のみ作成したが、他の領域についても同様の尺度化が可能と考えられるので、今後の課題としたい。

註

- 1) 文部科学省 幼稚園教育要領 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/
- 2) ただし、うち1項目は分割して作成した際にもとの文意を損なっていたため、分析の段階で除外した。

- 3) ここでは「自立」と命名したが「自律」の方がふさわしいかもしれない。
- 4) Wellman, H. M., Cross, D. & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory of mind development: The truth about false belief. *Child Development*, 72, 665-684.
- 5) ただし、3歳児は8名という少数のデータであることに注意しなければならない。

謝辞

調査にご協力いただいた幼稚園の教職員、保護者のみなさんに感謝いたします。また分析を手伝ってくれた奈良女子大学大学院生濱瑠美さんに感謝します。